

七仏薬師法における奏楽

鳥谷部 輝彦

始めに

奈良時代から現代まで、雅楽が奏でられる場として仏教法会が大きな比重を占めてきた。従来の研究で扱われてきた事例は、主に顕教に基づく法会（小野一九七〇、近藤二〇〇八など）であり、密教の法会・修法に見られた雅楽に関する研究は非常に少ない。中世の雅楽書には顕教の法会が多く書かれる一方で、密教修法は書かれていないことも、従来の研究に影響していると考えられる。

七仏薬師法は天台密教の修法である。日本音楽史で比叡山は、天台宗（比叡山派）の声明の中心地として研究が進んでいるが、雅楽の観点による研究はなされていない。比叡山と雅楽の繋がりには、史料上では八世紀末から始まる。延暦十三年（七九四）の根本中堂初度供養会では舞台を設け、「楽人六十六人秦氏」（『叡岳要記』上（五一八頁））が勤めたことにより、盛大な舞樂法会が執行されたと想像

できる。その後、根本中堂や講堂、総持院などの堂塔の落慶供養会や、十種供養会で雅楽が奏でられてきた。これらは顕教法会であるが、その一方で密教修法においても雅楽が奏でられてきた。その修法の一つが七仏薬師法である。本稿はこの修法を事例として、密教における雅楽の役割を考察する一助としたい。

論点の詳細を述べる前に、研究の視点と方法などについて述べたい。用いた史料は主に『門葉記』であり、これについては伊藤（二〇〇五）によって簡単に紹介したい。編纂者の尊円（一二九八―一三五六）は青蓮院門跡の門主で、伏見天皇の皇子である。内容は青蓮院代々の門主の修法・灌頂記録、青蓮院関係の寺院・院家関係の史料などに渡る。尊円の死後も補筆され、十二世紀から十五世紀初めにかけての約三百年間の記録を収める。尊円自筆本を主とした原

本は青蓮院に所蔵される。今日の流布本は『大正新脩大藏經』図像部十一〜十二であり、これは文化年間（一八〇四〜一八一八）の写本を底本とする、という。本稿の作成にあたり、『大正新脩大藏經』を用いた。

また、『門葉記』を始めとして、『行林抄』（仁平四年（一一五四）成立）、『阿婆嚩抄』（仁治三年（一二四二）〜弘安四年（一二八二）の成立と推定⁽²⁾）という天台密教の口伝・秘法の解説書が同時期に一挙に編纂されており、当時の修法の内容を多角的に知ることができ。なお、『門葉記』に比べると、『行林抄』『阿婆嚩抄』は七仏薬師法での雅楽の記述が詳しくないため、本稿では補助的に用いた。史料の引用に際しては、句読点・返点などを改めた場合もある。

以上の史料によって、対象時期は十二世紀中葉〜十四世紀中葉（鎌倉時代の前後）とした。これは、『門葉記』に収録されている七仏薬師法の事例がこの時期にあたるためである。先行研究ではこの時代の他種の法会における雅楽の研究が進みつつあるため、それらの研究の参考に供したい。

なお、今まで述べてきた「雅楽」という語は、歴史的には正しい語ではない。かつては雅楽という音楽分野はなく、現在の雅楽を構成する諸分野は「唐楽」「高麗楽」「東遊」「神楽」などと個別に呼んでいた。また、史料には「楽」「音楽」という語によって唐楽や高麗楽を奏でたことが記される。しかし、現代におけるわかりやすさを考慮して、本稿では「雅楽」という語によって唐楽または高麗楽を

意味することとした。

一、七仏薬師法について

七仏薬師法は比叡山天台密教の修法の一つである。これについては『密教大辞典』の項目「七仏薬師法」（九七六〜九七八頁）によって説明したい。

七仏薬師を本尊として、息災又は増益のために修する秘法。薬師七仏本願経・薬師本願経を本拠とす、七仏経云、（中略）可_レ於_レ静処以_レ諸香華・懸絵・幡・蓋、上妙飲食及諸伎楽、而為_レ供養。〔中略〕所_レ有業障、悉皆消滅、無病延年。疾病・賊盜・闘諍・戰陣・言詬・早滂、如_レ是等怖一切皆除。有_レ所願求、無_レ不_レ遂_レ意と。之に類せる文鈔からず。先蹤は嘉祥三年（八五〇）三月清涼殿上に赤雲覆ひたれば慈覚大師勅を奉じて息災の為に此法を修す。（中略）因りて台密には四箇大法の一として之を重んず、東密には薬師法の外に七仏薬師法を別に修することなし。道場は息災増益各相応の方に向ふ、壇場と助修の座との間は大幕を以て隔つ。本尊は等身の仏像七体、薬師を中心とし、次々を左右左右に安置す（後略）

（一）の補い、傍線、および「七仏経云、」以下の返点などは引用者による）

この修法は七仏薬師を本尊として、息災または増益のために修する。

増益壇の配置の一例は図1のようになる。道場中央に大壇、護摩壇が置かれ、奥には小壇(十二天壇、薬叉壇(夜叉壇)、聖天壇)が置かれ、その間に七仏薬師³⁾が安置される。また、大壇の左隣には経箱が置かれ、その中に本願薬師経(玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功德経』)と七仏薬師経(義浄訳『薬師瑠璃光七仏本願功德経』)が入られる。七仏経(七仏薬師経)には諸物とともに「諸伎楽」を用いて供養せよと書かれる。そのため、この修法に「伎楽」を用いることは經典に規定されており、それが日本では雅楽を用いるように解釈されたと考えられる。初例は嘉祥三年(八五〇)に慈覚大師により宮中で行われた。比叡山では四箇大法の一つとして重要視されてきた。真言密教では薬師法は修するが、七仏薬師法は修することはない。

なお、叡山文庫蔵の『七仏薬師法大法差定』は明治時代に書かれたとされる(『叡山文庫文書絵図目録』七五〇頁)。具体的な日付は記されていないが、その成立年代が確かならば、廃仏毀釈が蔓延している時代にも七仏薬師法が修され、比叡山の伝統が受け継がれていたことがわかる。

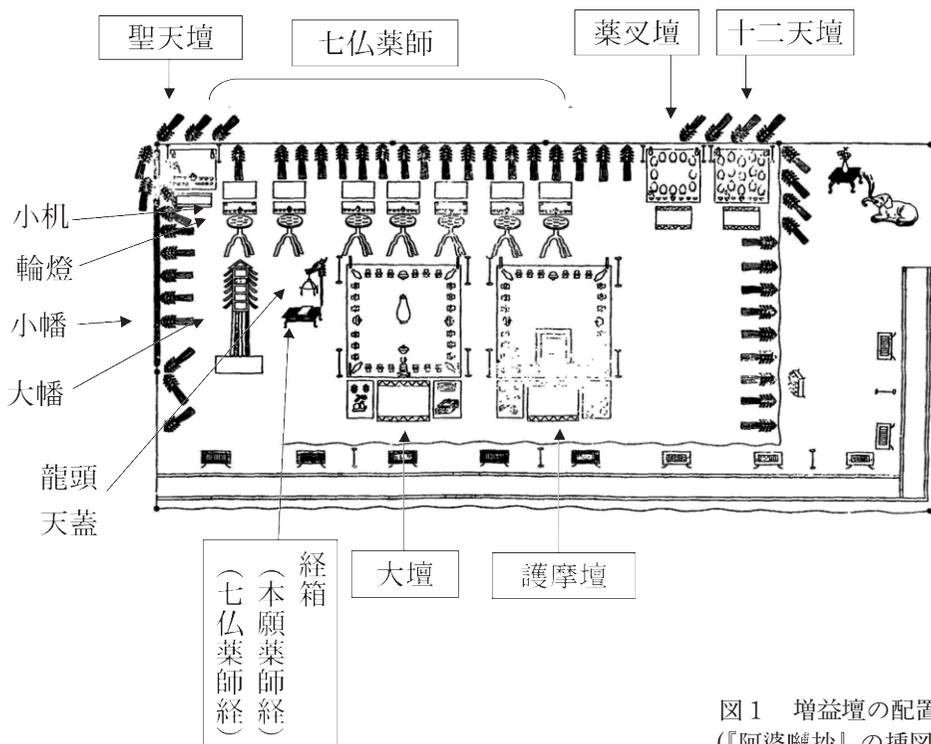


図1 増益壇の配置の一例
(『阿婆嚩抄』の挿図に加筆)

表2 奏楽を伴う七仏薬師法の事例

山＝山権記、門＝門薬記、代＝七仏薬師法代々日記、日＝七仏薬師法日記、御＝七仏薬師御修法記、昆＝昆沙門堂記、記＝七仏薬師法記
 大阿＝大阿闍梨、護阿＝護摩阿闍梨、小阿＝小阿闍梨
 ※曲名表記は史料のまま ※曲名に付く a～h は表3・表4 を参照

西暦	時	目的	場所	典拠	開白日	私事と奏事	結願日
1 1141	保延 07/05-29/06/06	女御御産御所	鳥羽南殿	門	行道＝奏楽 右脇御供～左脇香供＝奏楽 (一日で終了か)	行道＝奏楽 右脇御供～左脇香供＝奏楽	
2 1142	康治 01/05-12	鳥羽院御受戒	根本中堂北札堂	門	行道＝衆人も堂外を行道しつつ奏楽		
3 1143	康治 02/04/10-17	鳥羽院御願	根本中堂北札堂	門	行道＝奏楽		
4 1151	仁平 01/06-25	女院御所		門	行道＝奏楽 護摩～後鈴＝奏楽		
5 1153	仁平 03/09-17	鳥羽院御不子御所	鳥羽田中殿御所	門	行道＝奏楽 堂衆行道＝南庭で座奏する 護摩～後供養＝奏楽		
6 1160	永承 01/07-23-08/07	公家御所	大炊御門高倉	門	行道＝奏楽 振鈴～後供養の開始直後＝奏楽	行道＝奏楽 振鈴～後供養の開始直後＝奏楽 行道＝奏楽	
7 1161	応保 01/08/06-13	公家御所	養護 根本中堂北札堂	山 門	行道＝行道しつつ奏楽 五供養＝ 太平楽c 大阿下座～行道＝座奏	結願後の行道＝(奏楽つつ)行道 [衆人等候願]	
8 1164	長寛 02/07/11-18	公家御所		門	行道＝階下で座奏	行道＝大床を廻りつつ奏楽	
9 1178	治承 02/10/25-(7/11,12?)	中宮御産御所	六波羅池殿	門	行道＝大阿の登礼版～五供養～護摩＝奏楽 五供養＝ 太平楽c 後供養＝南縁で座奏	(「枝葉」などの作法は開白日と同じ)	
10 1195	建久 06/07-25-08/13	中宮御産御所 (増益壇による)	大炊殿	門	行道＝大阿の登礼版～五供養～護摩＝奏楽 護摩増以下にて供養＝ 慶雲楽c	四智謙・行道～前方便＝ 萬歳楽f を座奏する 古摩～念誦＝ 太平楽g 結願作法～ 謙 ・行道＝ 太平楽g 四智謙・行道＝ 萬歳楽f 前方五供養～後五供養＝ 太平楽g	
11 1197	建久 08/12-25	翌年正月朔日の日御の御所	根本中堂	代	講・行道～?＝奏楽 行道＝大阿の登礼版～ 萬歳楽b 前方五供養～後五供養＝ 太平楽g	四智謙・行道～前方便＝ 萬歳楽f を座奏する 古摩～念誦＝ 太平楽g 結願作法～ 謙 ・行道＝ 太平楽g 四智謙・行道＝ 萬歳楽f 前方五供養～後五供養＝ 太平楽g	
12 1207	建永 02/02/20-27		賢陽院殿	門	行道～大阿の登礼版＝ 萬歳楽b 護阿の立座～後供養＝奏楽	四智謙・行道～大阿の登礼版＝ 萬歳楽f 大阿の初願御～五供養＝ 慶雲楽g 大阿の下座～行道＝ 太平楽g 四智謙・行道～大阿の登礼版＝ 萬歳楽f 大阿の初願御～五供養＝ 慶雲楽g 大阿の下座～行道＝ 太平楽g	
13 1212	建暦 02/06/21-27	一院御所	押小路殿	門	行道～大阿の登礼版＝ 萬歳楽b 前方五供養～後五供養＝ 太平楽g	四智謙・行道～大阿の登礼版＝ 萬歳楽f 大阿の初願御～五供養＝ 慶雲楽g 大阿の下座～行道＝ 太平楽g	
14 1216	建保 04/07/21-29	(増益壇による)	高陽院殿	門	集会＝ 平調々子a → 謙 ・行道～前方便＝行道しつつ奏楽	四智謙・行道～大阿の登礼版＝ 萬歳楽f 大阿の初願御～五供養＝ 慶雲楽g 大阿の下座～行道＝ 太平楽g	
15 1217	建保 05/03/04-22	中宮御産御所	一條院殿(南殿)	門	行道＝大阿の登礼版＝奏楽 初願御～後供養＝ 太平楽c	四智謙・行道～大阿の登礼版＝ 萬歳楽f 大阿の初願御～五供養＝ 慶雲楽g 大阿の下座～行道＝ 太平楽g	
16 1217	建保 05/07/23-29	一院護病御所 (息災壇による)	高陽院殿	門代	行道～大阿の登礼版＝ 萬歳楽b 前方五供養～後五供養＝ 慶雲楽c 大阿の下座～行道＝ 太平楽g 諸佛列立～四智謙・行道～着礼版＝ 万歳楽b 戸摩壇・小壇にて行道～大壇にて後五供養＝ 太平楽c 諸佛列立～(四智謙・行道～着礼版＝ 万歳楽b 前方五供養の開始～後供養＝ 太平楽c	四智謙・行道～大阿の登礼版＝ 萬歳楽f 大阿の初願御～五供養＝ 慶雲楽g 大阿の下座～行道＝ 太平楽g 諸佛列立～四智謙・行道～着礼版＝ 万歳楽f 戸摩阿が戸摩壇に着き戸摩開始～大壇にて後五供養～四智謙＝ 太平楽g 内陣の幕を上げる～行道＝ 千秋楽h 行道＝ 万歳楽f (護阿・小阿と行道＝奏楽)	
17 1218	建保 06/10/01-10	中宮御産御所	一條院殿	門	諸佛列立～四智謙・行道～着礼版＝ 万歳楽b 戸摩壇・小壇にて行道～大壇にて後五供養＝ 太平楽c 諸佛列立～(四智謙・行道～着礼版＝ 万歳楽b 前方五供養の開始～後供養＝ 太平楽c	四智謙・行道～大阿の登礼版＝ 萬歳楽f 大阿の初願御～五供養＝ 慶雲楽g 大阿の下座～行道＝ 太平楽g 諸佛列立～四智謙・行道～着礼版＝ 万歳楽f 戸摩阿が戸摩壇に着き戸摩開始～大壇にて後五供養～四智謙＝ 太平楽g 内陣の幕を上げる～行道＝ 千秋楽h 行道＝ 万歳楽f (護阿・小阿と行道＝奏楽)	
18 1219	建保 07/02/06-11	源実朝薬去を受けて 國家安寧の御祈	高陽院殿	日	諸佛列立～(四智謙・行道～着礼版＝ 万歳楽b 前方五供養の開始～後供養＝ 太平楽c	四智謙・行道＝ 万歳楽f 大阿の初願御～五供養＝ 慶雲楽g 大阿の下座～行道＝ 太平楽g 諸佛列立～四智謙・行道～着礼版＝ 万歳楽f 戸摩阿が戸摩壇に着き戸摩開始～大壇にて後五供養～四智謙＝ 太平楽g 内陣の幕を上げる～行道＝ 千秋楽h 行道＝ 万歳楽f (護阿・小阿と行道＝奏楽)	
19 1221	承久 03/01/22-28		禁中	御座	四智謙・行道～大阿の登礼版＝ 萬歳楽b 前供養御願～各壇行道＝ 太平楽c	四智謙・行道＝ 万歳楽f ※結願三師音楽等万歳楽「供養楽」(中略)長慶楽「又行道三師奏音楽大平楽」(昆)	
20 1232	貞永 01/09/12-22	中宮御産御所	一條院殿	門代	四智謙・行道＝ 萬歳楽b 各壇行道＝ 慶雲楽c	四智謙・行道＝ 萬歳楽f 護阿の護摩～大壇の五供養＝奏楽	

西暦	時 期	目的	場所	典拠	開白日	結願日
21	1237 嘉長03/03/19-25	藤原道家による御祈	一條殿	門	四智讃・行道→大阿の登礼版(法)の途中＝萬歳樂b 護阿・小阿の入幕と行法開始→大壇の後供養＝慶雲樂c	四智讃・行道→大阿の登礼版＝萬歳樂f 護阿の入幕と護摩開始→大壇の後供養＝慶雲樂g
22	1238 暦仁01/11/29- /12/05	天養御祈	根本中堂	門	行道＝奏樂	調子e→誦・行道＝萬歳樂f (行法後の)誦・行道＝衆人も行道しつつ奏樂
23	1240 延應02/02/21-27	菩提御祈	仁壽殿	門	平調々子a→四智讃・行道→大阿の登礼版＝行道しつつ萬歳樂b 護阿・小阿の入壇場→後五供養(大阿が護摩香器を鳴らすまで)＝ 慶雲樂c	調子e→大阿の登礼版＝萬歳樂f 後五供養(護摩香器を鳴らすまで)＝慶雲樂g (行法後の)行道＝太平樂破h
24	1243 寛元01/06/06-10	中宮御産御祈	今出川殿	門	調子a→四智讃・行道→大阿の登礼版＝行道しつつ萬歳樂b 各壇にて行法→後五供養＝慶雲樂cを数反奏す	(四智讃・行道の時か)＝奏樂(雨のため行道せず)
25	1244 寛元02/02/26- /03/04	藤原公経の御祈	西園寺五大本堂	門	平調々子a→四智讃・行道→大阿の登礼版＝行道しつつ奏樂 古摩阿・小阿の行法→後五供養＝奏樂	音取e→四智讃・行道→大阿の登礼版＝行道しつつ奏樂 古摩阿の占摩→後供養＝奏樂 四智讃・行道＝行道しつつ奏樂
26	1245 寛元03/10/01-	天養御祈	院院内裏広御祈	門	調子a→四智讃・行道→大阿の登礼版＝萬歳樂bを座奏する 護阿・小阿の護摩→大阿の下礼版＝慶雲樂cを数反奏樂する	調子e→誦・行道→大阿の登礼版＝萬歳樂f 護阿の護摩＝慶雲樂g (結願作法等の後の)行道＝太平樂hを座奏する
27	1247 宝治01/09/05- /10/09	中宮御産御祈	今出川殿	門	平調々子a→四智讃・行道→大阿の登礼版＝誦上を行道しつつ 各壇行法→大壇にて五供養(護摩香器を供するまで)＝慶雲樂c 調子a→大壇を上げて護摩列立→四智讃・行道→大阿の登礼 版＝誦上を行道しつつ万歳樂b 初鈴の護阿・小阿の起座と行法開始→五供養普供養＝奏平樂c 大阿の下座→行道→？＝行道しつつ千秋樂d	調子e→大壇を上げて護摩列立→誦・行道→大阿の登礼版＝万歳樂f 大阿が下座し礼仏→律儀の行道＝太平樂h 護阿・小阿の起座と行法開始→大阿の五供養→普供養→誦＝大平樂g 大阿の下座と礼仏→行道＝誦上を行道しつつ千秋樂h
28	1254 建長06/05/10-28	大宮女院御産御祈	今出河亭	記	【管外事有之】 平調々子a→四智讃・行道→大阿の登礼版＝行道しつつ萬歳樂b 護阿・小阿の起座と行法開始→大壇の五供養(護摩香器火坑ま で)＝慶雲樂c	【衆人等被召座庭上】 平調々子a→四智讃・行道→大阿の前方便の途中＝萬歳樂f ？→大壇の五供養の途中＝奏樂 四智讃・行道→大阿の登礼版＝萬歳樂g (御座の)占摩→大壇の五供養(普供養まで)＝慶雲樂g (古摩阿の)座敷作法＝太平樂破h
29	1260 正元02/02/13-29	大宮女院御産御祈	今出川御祈	門	平調々子a→四智讃・行道→大阿の登礼版＝行道しつつ萬歳樂b 護阿・小阿の起座と行法開始→大壇の五供養(護摩香器火坑ま で)＝慶雲樂c	平調々子a→四智讃・行道→大阿の前方便の途中＝萬歳樂f ？→大壇の五供養の途中＝奏樂 四智讃・行道→大阿の登礼版＝萬歳樂g (御座の)占摩→大壇の五供養(普供養まで)＝慶雲樂g (古摩阿の)座敷作法＝太平樂破h
30	1262 弘長02/05/10- /06/02	東二條院御産御祈	今出川殿	門	二條殿	四智讃・行道→大阿の登礼版＝萬歳樂g (御座の)占摩→大壇の五供養(普供養まで)＝慶雲樂g (古摩阿の)座敷作法＝太平樂破h
31	1265 文永02/07/21-28	皇后宮御産御祈	二條殿	門	護阿・小阿の入幕と行法開始→大壇の普供養＝太平樂c	調子e→四智讃・行道→前方便の途中＝萬歳樂f ？→大壇の五供養の途中＝慶雲樂g (御座の)占摩→大壇の五供養(普供養まで)＝慶雲樂g (古摩阿の)座敷作法＝太平樂破h
32	1267 文永04/11/17- (23か)	皇后宮御産御祈	萬里小路御所	門	誦・行道→大阿の登礼版＝萬歳樂b 護阿・小阿の入幕と行法開始→大壇の後五供養(護摩香器火坑ま で)＝慶雲樂c	調子e→四智讃・行道→前方便の途中＝萬歳樂f ？→大壇の五供養の途中＝慶雲樂g (御座の)占摩→大壇の五供養(普供養まで)＝慶雲樂g (古摩阿の)座敷作法＝太平樂破h
33	1268 文永05/07/17-27	異国御祈	根本中堂	門	17日：「衆人行道事」の記述あり 19日：「結願、衆人塔飯事」の記述あり 24日：「結願作法」に「衆人行道」の記述あり 四智讃・行道→先方便の途中＝萬歳樂b 大壇の初開伽→後五供養＝慶雲樂c	調子e→四智讃・行道→前方便の途中＝萬歳樂f ？→大壇の五供養の途中＝慶雲樂g (御座の)占摩→大壇の五供養(普供養まで)＝慶雲樂g (古摩阿の)座敷作法＝太平樂破h
34	1281 弘安04/04/08-15	異国降伏 (蒙古襲来による)	根本中堂	門	平調々子a→四智讃・行道→大阿の登礼版＝萬歳樂bを座奏す 護阿・小阿の入幕と行法開始→後供養＝慶雲樂c	四智讃・行道→先方便の途中＝行道しつつ萬歳樂f 大壇の初開伽→後五供養＝慶雲樂g (結願作法後の)誦・行道＝太平樂破h
35	1282 弘安05/08/02-09		萬里小路御所	門	平調々子a→四智讃・行道→大阿の登礼版＝萬歳樂bを座奏す 護阿・小阿の入幕と行法開始→後供養＝慶雲樂c	平調々子e→四智讃・行道→大阿の登礼版＝萬歳樂f 護阿・小阿の入幕と行法開始→大壇の五供養(護摩香器を供するまで)＝慶 雲樂g 仏布施・解界奉送→行道＝慶徳h
36	1291 正応04/08/01-08	法皇御重臣御祈	常盤非殿	門	調子a→四智讃・行道→大阿の登礼版作法の途中＝萬歳樂bを 座奏する 護阿・小阿の入幕と行法開始→大壇の後供養の途中＝慶雲樂c 平調々子a→反→諸僧列立→四智讃・行道＝行道しつつ萬歳樂b (衆拍子)・一鼓を懸ける 護阿・小阿の入幕と行法開始→大壇の五供養の途中＝慶雲樂c	調子e→四智讃・行道→？＝萬歳樂f(雨のため行道せず) 初鈴→大壇の後五供養の途中＝慶雲樂g 大阿の下礼版→(四智讃・行道か)＝太平樂破h 調子e→反→諸僧列立→萬歳樂fを少しく吠いて止む→四智讃・行道→登礼 版＝萬歳樂f 全部読終の途中→五供養＝慶雲樂g(行道して一鼓を伴ったか) 全部読終後の)礼仏＝太平樂破h
37	1303 乾元02/閏04/ 19-/05/09	昭訓「院御産御祈	今出川殿	門	平調々子a→四智讃・行道→大阿の登礼版＝行道しつつ萬歳樂b 護阿・小阿の入幕と行法開始→大壇の後五供養の途中＝慶雲 樂c	平調子e→諸僧の列立→四智讃・行道→大阿の登礼版＝行道しつつ萬歳 樂(護阿・小阿の入幕と行法開始→五供養の途中まで)＝慶雲樂g 後行道→大阿の登礼版＝行道しつつ萬歳樂h (解界奉送後の)行道＝太平樂h
38	1326 嘉暦01/06/18-19	中宮御産御祈	京極殿	門		平調子e→諸僧の列立→四智讃・行道→大阿の登礼版＝行道しつつ萬歳 樂(護阿・小阿の入幕と行法開始→五供養の途中まで)＝慶雲樂g 後行道→大阿の登礼版＝行道しつつ萬歳樂h (解界奉送後の)行道＝太平樂h
39	1350 観応01/07/30-/ 08/07	地蔵御祈	仙洞御祈	門	平調々子a→諸僧列立→四智讃・行道→大阿の登礼版＝萬歳樂b を座奏する 古摩阿・小阿の入幕と行法開始→大壇の後五供養の途中＝慶雲 樂c	平調子e→諸僧の列立→四智讃・行道→大阿の登礼版＝行道しつつ萬歳 樂(護阿・小阿の入幕と行法開始→五供養の途中まで)＝慶雲樂g 後行道→大阿の登礼版＝行道しつつ萬歳樂h (解界奉送後の)行道＝太平樂h

表3 開白日の次第

	道場全体	大壇	仏事	護摩壇	小壇	楽事	奏楽箇所
(参入)	諸僧集会。					楽人が奏楽場所へ着く。 楽次第を楽人に伝える。	
(清め)	時金を打つ。					調子または音取を吹く。	a
	諸僧列立。 四智讃を誦す。					奏楽（座奏、または道場外縁を行道しつつ奏楽）。	b
	誦しながら幕内で行道（前行道）。					↓	
	幕を上げる。助修・下脇は幕外へ出て讃誦し、着座。	行道の末尾から大阿が大壇の礼版に着く。				奏楽ここまで。	
		礼仏。懺悔偈。浄三業。塗香塗手。前方便。				（前方便まで奏楽する場合もあり。）	
	総礼						
(勧請)	時金を打つ。						
		開眼：灑水。表白。薬師経開題。釈仏釈経。神分。供養文。驚覚。九方便。発願。					
	念誦読経。	五天願。					
(供養)		初鈴を振る。					
		行法（胎藏界略行）を始める。	護阿が起座し、登礼版。		小阿が起座し、各々壇前に着く。	奏楽（開伽より）。 ↓ 後供養まで奏楽。（楽人が退出する場合もある）	c
		道場観。開伽。讃。入三摩地。正念誦。後入三摩地。観想。後供養。	金剛羯磨。根本印。念誦。入護摩。諸尊段。世天段。など ※行法を終え、退座する。		薬叉壇阿：五供養。普供養。根本印。など ※小阿は行法を終え、退座する。		
		後鈴を振る。					
(廻向)		廻向方便。随方廻向。				奏楽。	d
		大壇阿闍梨が下座し、礼仏する。				↓	
	四智讃を誦し、行道する（後行道）。 諸僧が本座に着く。 後加持所に移る。					奏楽ここまで。退出。	
(後加持)	大壇阿闍梨が後加持所にて後加持を行う。 退出。						

表4 結願日の次第

	道場全体	大壇	仏事	護摩壇	小壇	楽事	奏楽箇所
	後夜作法を終える。 室内を掃除し、布施・経を壇上および脇机に置く。						
(参入)	諸僧集会。					楽人が奏楽場所へ着く。 楽次第を楽人に伝える。	
(清め)	時金を打つ。					調子または音取を吹く	e
	諸僧列立。 四智讃を誦す。					奏楽（座奏、または道場外縁を行道しつつ奏楽）。	f
	誦しながら、幕内で行道（前行道）。					↓	
	誦しながら、幕内で行道（前行道）。	行道の末尾から大阿が大壇の礼版に着く。				奏楽ここまで。	
		礼仏。懺悔偈。浄三業。塗香塗手。前方便。				（前方便まで奏楽する場合もあり。）	
	総礼						
(勧請)	念珠読経。	神分祈願。驚覚。五悔。					
		五天願。					
(供養)		初鈴を振る。					
		六種供養。五供養。	護摩壇に登礼版。		小阿が起座し、各々壇前に着く。	奏楽。 ↓ 五供養まで奏楽。（楽人が退出する場合もある）	g
		後鈴を振る。	金剛羯磨。金剛輪。根本印。念誦。入護摩。など				
(廻向)	時金を打つ。						
		礼仏。					
		結願作法：巻数を読み、護摩壇へ送る。					
		補闕。懺悔真言。宝号。神分。五悔。廻向。奉仏布施。解界。	巻数を受け取り、焼了する。			奏楽。	h
		解界奉送（花を投げる）。				↓	
		鈴杵開伽等を取り、護摩を始める。	壇壇作法。			↓	
		大壇から下座し、礼仏する。	護摩壇から下座し、礼仏する。			↓	
(後加持)	四智讃を誦しながら、幕内行道（後行道）。						
	諸僧が本座に着く。						
	軽机を撤去し、後加持所に移る。					奏楽ここまで。退出。	
	公脚・上脚が着座する。 大壇阿闍梨が後加持所に着き、陀羅尼衆がその後ろに着く。 大阿が後加持を行う。 布施を引き取る。 退出。						

表3・表4は、『阿婆囉抄』七仏薬師本、『行林抄』第三（七仏薬師法）、『門葉記』七仏薬師法一〜九により作成。

二、奏樂の記録

次に実際の古記録を整理したい。当時、鎌倉時代の前後の時期に、七仏薬師法がどのように修されて、どのような雅楽が奏でられていたものであろうか。

表2に、古記録の中から奏樂が確認できる記録を整理した。この表のうち雅楽に関しては後に詳しく扱うので、ここでは修法の時・目的・場所に注目したい。事例の年代は十二世紀中葉から十四世紀中葉となった。『門葉記』を見ると、修法の目的は中宮の御産御祈のためや、天変地異を鎮めるための事例が多い。他の法（尊星王法、普賢延命法、五壇法など）と併せて修する事例も多い。全七日で修することが基本であるが、御産御祈の場合は七日間より短かったり長かったりする。場所は、京都の貴族私邸と宮中が多く、比叡山根本中堂での事例は少ない。これらの修法では比叡山僧が主導している。

修法の日程と次第については、全日程のうち特に重要な日が三箇日ある。初日の開白日では、七仏薬師を開眼し、修法の趣旨を述べ、各壇にて行法を始める。その後、場所を移して後加持作法を行う。結線日（全七日の場合は第四日）では、大壇阿闍梨が十二神将を表す呪を唱えて、印を結びながら、呪を糸に結び籠む。結数は108、49、12がある。心願成就した時や、年月が経た時に、薬師の小行法を修して結び目を解く。最終日の結願日には、結願作法と壞壇作法（破

壇作法とも言う）を行う。その後、場所を移して後加持作法を行い、諸僧は公卿から布施を受け取る。以上の三箇日のうち雅楽を伴う日程は開白日と結願日であり、結線日には伴わない（ただし、例外もある⁵）。また、諒闇のため雅楽を伴わない事例もある⁶。

開白日と結願日の構成を整理して作表した。開白日の次第は表3に整理し、「仏事」には道場での諸僧の行動を並べ、「樂事」には樂人の行動を並べた。横道（二〇〇五）を参考にして、表の最左列に「清め」などの仮の言葉を（ ）の中に入れ、次第の構成を明確にした。表の最右にある a、b、c、d は奏樂される箇所を表わす。

清め|| 修法の「導入部」に相当する部分。まず、樂人が a で調子または音取を奏でる。その次に、諸僧が四智讃を誦しながら、道場の中を行道する時、b で奏樂する。なお、この b で、樂人の奏樂は行道する場合も、樂人座に座って奏でる場合もある。

供養|| 修法の「主題部」に相当する部分。各壇では供養の作法を行い、c で奏樂する。この時の奏樂を「供養樂」と記す記録があり、寛元元年（一二四三）六月六日で「振鈴之後、即供養樂^{慶雲樂}。」（『門葉記』七仏薬師法三（図像部十一、五五八頁）の一点が確認できる。

廻向|| 修法の「結尾部」に相当する部分。修法の終了に対し、d で奏樂する。ただし、この d で奏樂された事例は事例は非常に少ないため、通常は奏樂しなかったと考えるてもよいだろう。

結願日の次第は表4に整理した。整理の仕方は表3と同様である。
e～hに奏楽の箇所を表わした。

清めⅡ修法の「導入部」に相当する部分。開白日の「清め」と同様に、まず衆人がeで調子または音取を奏でる。その次に、諸僧の四智讃・行道に対し、fで奏楽する。

供養Ⅱ修法の「主題部」に相当する部分。各壇では供養の作法を行い、gで奏楽する。この時の奏楽を「供養楽」と記す記録があり、承久三年(一二二二)正月二十八日では「供養楽、振鈴之時奏^レ之^{長慶}」(『七仏薬師御修法記』(八三八頁)、嘉禎三年(一二三七)三月二十五日では「次初鈴之後、奏^レ供養楽^{慶雲}」(『門葉記』七仏薬師法八(圖像部十一、六一三頁)の二点を確認できる。

廻向Ⅱ修法の「結尾部」に相当する部分である。ここでは目的が達成されたことにより結願作法を行い、結界を解いて原状復帰する解界に対し、hで奏楽する。開白日のdと異なり、hは必ず奏楽されたと考えてよいだろう。

三、七仏薬師法における奏楽

以上を踏まえて、特に雅楽について整理したい。まず、表2に戻り、開白日と結願日の曲目から見ていきたい。表2では曲目の横にa～hを付けたが、これは表3・4の奏楽箇所に対応している。表

2を見ると、初めの頃の記録では曲目が不明だが、一二〇〇年頃から曲目が徐々に記録されるようになってきたことがわかる。また、その曲目もほぼ同じような曲が使われていることがわかる。そこで、曲目を整理すると次のようになる。曲目の下に付けた数字は事例の数を表わす。

《開白日》

- a (12例) 平調々子(6)、調子(4)、ネトリ・音取(2)
b (21例) 萬歳楽
c (23例) 太平楽破(「太平楽」「大平楽」「泰平楽」の表記を含む)
(8)、慶雲楽(15)

※表2によると、太平楽破から慶雲楽へと移行したことがわかる。

- d (3例) cⅡ太平楽破↓dⅡ千秋楽(2)
cⅡ慶雲楽↓dⅡ太平楽破(1)

《結願日》

- e (12例) 平調々子(2)、調子(8)、ネトリ・音取(2)
f (22例) 萬歳楽
g (18例) 太平楽破(「太平楽」の表記を含む)(4)、慶雲楽(13)、長慶子(1)
h (15例) gⅡ太平楽破↓hⅡ太平楽急(1)
gⅡ「太平楽」↓hⅡ千秋楽(2)

g || 慶雲樂 ↓ h || 太平樂破 (「太平樂」の表記を含む)

(10)

g || 慶雲樂 ↓ h || 慶徳・鶏徳 (2)

開白日の a ↓ d と結願日の e ↓ h は似た内容になっている。a と e は調子または音取である。「平調」という調が明記されている事例は合わせて8例あるが、何調なのか不明な事例のほうが多い。ただし、その後すぐに演奏する b と f の萬歳樂が平調に属する曲であるため、遡って a と e は平調の調子、または平調の音取であったことが言える。

b と f は四智讃に対する曲であり、全ての事例で萬歳樂を奏でている。ここでは行道しながら奏樂する事例も多く、その場合は萬歳樂を奏でながら道場の外縁を歩き回っていたことになる。なお、行道の終結には壹鼓と奚婁鼓による「一曲」が舞われたと考えられるが、これについては後述する。

c と g は「供養樂」と呼ばれる。具体的な曲目は太平樂破と慶雲樂である。開白日の c については、十三世紀では太平樂破が多く使われていたが、だんだんと慶雲樂を使うように変わってきた。その一方で結願日の g については、そのような推移は見られず、慶雲樂が圧倒的に多く使われた。

開白日の d で演奏された事例は非常に少なく、3例しかない。そのため、通常は奏樂しなかったと考えたい。ただし、その3例につ

いて詳しく見ると、c で奏でられた曲によって、d で奏でられた曲が変わってくるのがわかる。すなわち c と d では、太平樂破と千秋樂、慶雲樂と太平樂破、という組み合わせが見られる。なお、d が奏樂された記録は、表2の16番、17番、28番であり、十三世紀前半頃の四十年間に限ることができると推定される。これはもしかすると時代の特徴であったのかもしれないが、現段階の史料ではその判断はできない。それに対して、結願日の h では頻繁に奏樂された。g と h の組み合わせで最もよく演奏されたのは、10例に及ぶ慶雲樂と太平樂破の組である。

以上の曲が奏でられたのだが、次第の全体を通して奏樂曲の組み合わせに何通りかあったように見られる。a b (平調々子、音取) と e f (萬歳樂) は不変だが、c d と g h の組み合わせに差異が見られる。

(ア) c g 慶雲樂 ↓ d h 太平樂破

(イ) c g 太平樂 (破) ↓ d h 千秋樂

(ウ) g 長慶子 ↓ h 奏樂 (曲目不明)

(ア) は事例の大半を占める組である。息災または増益を行う七仏薬師法にふさわしい選曲と言える。(イ) は僅かな事例であるが、奏樂曲の最後に千秋樂を奏でるため、次第の終了を意図した選曲である。ただし、(ウ) の選曲が意図するところは不明である。

また、曲目を調べてみると、ほとんどが「平調」という調に属する曲である。平調以外では、太平樂破は楽譜上の分類では「太食調」

に属するが、楽理構造上は「平調」の傾向を示す。太平楽急と長慶子は「太食調」であり、千秋楽は「盤涉調」である。平調と太食調は主音がEであり、盤涉調はHである。千秋楽を奏でた事例はdの2例、hの2例であるが、この事例ではEとHによる五度関係の調によって統一感が聴かれただろう。また、千秋楽を用いない事例は平調か太食調の曲を用いたので、Eの主音によってさらに統一感が増したであろう。

これらの曲を奏でた楽人はどのような構成をしていたのであろうか。楽器のうち、特に打物（太鼓、鞆鼓、鉦鼓）は、寺から借用していたようである。建暦二年（一二二二）六月二十日（表2の13番、開白日）では押小路殿で修されたが、「太鼓等借用法勝寺」。破損之間、無音也。」（『門葉記』七仏薬師法一（図像部十一、五三八頁）のように法勝寺から太鼓などを借用し、その結願日である六月二十七日では「楽器等無之由令申。仍大阿闍梨所持太鼓・鞆鼓・鉦鼓等、為三庁沙汰、被渡之云々」（同（同十一、五三九頁）と書かれる。

楽人の人数は、八人または五人が記され、これらは大内楽所の者であったと考えられる。四点の記述を引用する。

(ア) 「行道楽人」永暦元年（一一六〇）八月七日（表2の6番、『門葉記』七仏薬師法一（図像部十一、五二九頁））

(イ) 「楽人八人庭上著座。」寛元二年（一二四四）三月四日（表2

の25番、同四（同十一、五六〇頁））

(ウ) 「楽器。大鼓在撥、鞆鼓一面。横笛一。装束五具重装束也。左右左右。」文永五年（一二六八）八月十七日（表2の33番、同五（同十一、五七九頁））

(エ) 「伶人五人歟」乾元二年（一二三〇）（表2の37番、同六（同十一、五九八頁））

比叡山根本中堂で修した事例のうち、暦仁元年（一二三八）（表2の22番）では「開白・結願。楽人登山事公家御沙汰也。」（『門葉記』七仏薬師法四（五五二）と書かれるため、京都から比叡山へ登ったことがわかる。登山の記述は文永五年（一二六八）八月十七日（表2の33番）にも見られる。恐らくは京都方と奈良の楽人で編成されていただろう。

ただし四つの引用のうち、(ウ)の割注「重装束也。左右。已上五具鳥甲等。」の意味するところが判然としない。左方の襲装束と右方の襲装束を合わせて五人分ということの意味するであろうが、人数のバランスが悪い。そこで考えられるのが、当時の「楽人」「伶人」という語は地下楽人を指すが、楽器担当者のうち身分の低い者は意味しなかった、ということである。⁽⁸⁾ こういう身分の低い者が打物を担当したと考えれば、楽器担当者の人数を少し増やして考えることができる。

なお、楽人編成または楽器編成は、全ての事例で同一であったのではなく、流動的に変わっていたようである。例えば、延応二年（一二四〇）二月二十一日（表2の23番）では「抑今夜楽人吹物許。随

身不用^ニ意打物^一云々。」(『門葉記』七仏薬師法四(図像部十一、五五五頁))と記録される。この時は吹物(管楽器の笙、篳篥、龍笛を指す)だけの編成であり、打物はなかったようである。従って、全ての事例を通してみると、標準的には管(笙、篳篥、龍笛)と打(太鼓、鞆鼓、鉦鼓)で編成するのであるが、場合に依りて楽器を減らすこともあったようである。このような流動的な措置は、四智讃の奏楽に座奏であったり、行道しながらの奏楽であったりすることとも通じる。恐らく、七仏薬師法の樂事に關しては、定式や規定が確立していなかったと考えられる。

樂器については、壹鼓と奚婁鼓も使われことが確認できる。

- (ア)「此時、樂人庭上行道^略。一擊之^{久行令打}。」宝治元年(一二四七)九月五日(表2の27番、『門葉記』七仏薬師法五(図像部十一、五六六頁))

- (イ)「舞人懸^レ一^寄拍子^一、儼^レ之^{乾元二年(一二三〇三)閏四月十九日(表2の37番、同六(同十一、五九九頁))}」

- (ウ)「但、今日樂人行道有^レ之^打壺[・]奚婁^一。」觀応元年(一二三五〇)八月七日(表2の39番、同九(同十一、六二八頁))

「壹鼓」は「一鼓」とも表記され、記録文では「壹」「一」と略記されることが多い。樂人たちが行道しながら奏樂する時、壹鼓は右舞一の者が、奚婁鼓は左舞一の者が担当し、両者は行列の先頭に並び立つ。ただし、左舞一の者は奚婁鼓の他に、鼗鼓(ふりつづみ、と

うこ)を左手に持つ。(ア)では多^{おほひさき}久行が壹鼓を打っている。久行は当時67歳、京都方の樂人である。『樂所補任』の当年前後の記録から、大内樂所に「右舞」の者として勤めていたと考えられる。(イ)では壹鼓を紐で首に懸けた右舞人が、「一曲」という舞曲を舞っている様子が書かれている。「一曲」は行道が終結して樂人が列立してから、舞われる。この時、行道の樂は萬歳樂であった。(ウ)では、壹鼓と組にされる奚婁鼓も、やはり使われていたことを示す記述であり、左舞一の者が勤仕していたことがわかる。この左舞一の者は奈良興福寺に所属する狛^まである。従って、七仏薬師法で壹鼓・奚婁鼓が使われた場合、多と狛が樂人編成の中に混じっていたと考えられる。

最後に、このような樂人たちはどこで奏樂していたのであろうか。樂人が座って奏樂する場所を言い表す語はいろいろあるが、本稿では「樂人座」で統一したい。『門葉記』には樂人座について多くの記述があるが、そのうちの二点を引用する。

- (ア)「北廻廊第五六間、為^{鋪設樂器等}樂所^一。」弘安四年(一二八一) (表2の34番、『門葉記』七仏薬師法五(図像部十一、五八三頁))

- (イ)「樂所ノ日隱間、前庭上敷^{打板}、其上紫綠暈三疊東西行^置之^{引レ幔}、置^{樂器}。」觀応元年(一二三五〇) (表2の39番、同九(同十一、六二四頁))

(ア)(イ)ともに、樂人座を「樂所」と書いているが、(ア)では

道場につながる廊下の一部を楽人座として、(イ)では道場の前庭の一部を楽人座としている。『門葉記』にはさらに具体的に、指図の中に楽人座の位置が示されているので、それを図5～図7に転載した。図5では右下隅に示されるが、これは(ア)と同じように廊下の一部である。図6では下に示されるが、これもまた廊下の一部であり、道場に非常に近い位置にある。図7は前庭に楽人座があるように描かれている。

まとめ

比叡山の大法の一つである七仏薬師法では雅楽曲の奏樂がなされ、その修法次第の清め(導入部)、供養(主題部)、廻向(結尾部)のそれぞれにおいて奏樂された。ただし、曲目は限られ、平調の曲が多い。楽器編成は、標準的には管(笙、篳篥、龍笛)と打(太鼓、鞆鼓、鉦鼓)であるが、行道列には壹鼓・奚婁鼓が含まれたようである。楽人は京都方の楽人と興福寺楽人で構成されていたようであるが、詳細は不明であり、当時の「楽人」とは認められなく身分の低い者も楽器を担当していた可能性もある。楽人座は、道場外の廊下、あるいは道場前庭に設けられた。

本稿では十二世紀中葉から十四世紀中葉の七仏薬師法を、簡単に扱った。この時期の奏樂は事例によって流動的であり、定式あるいは規定が未確立であったと言える。それは、大法に対する雅楽の規

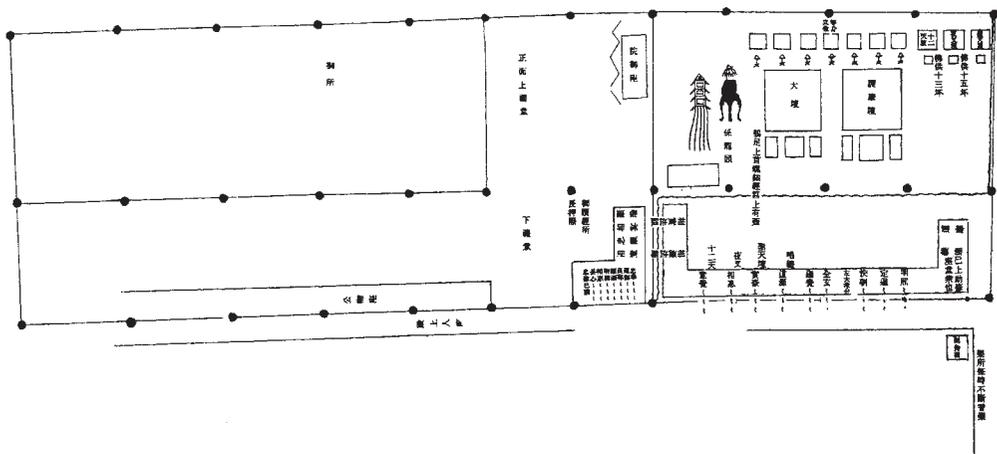


図5 康治元年(1142、表2の2番)の指図(『門葉記』より)

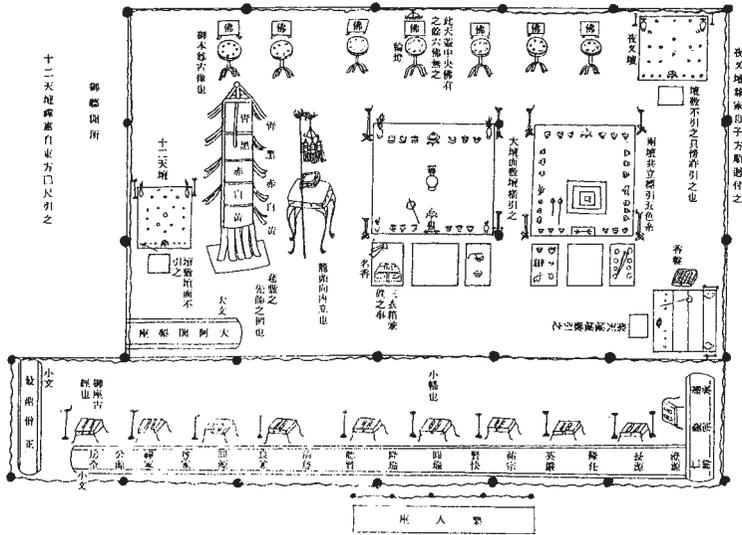


図6 宝治(1247、表2の27番)の指図(『門葉記』より)

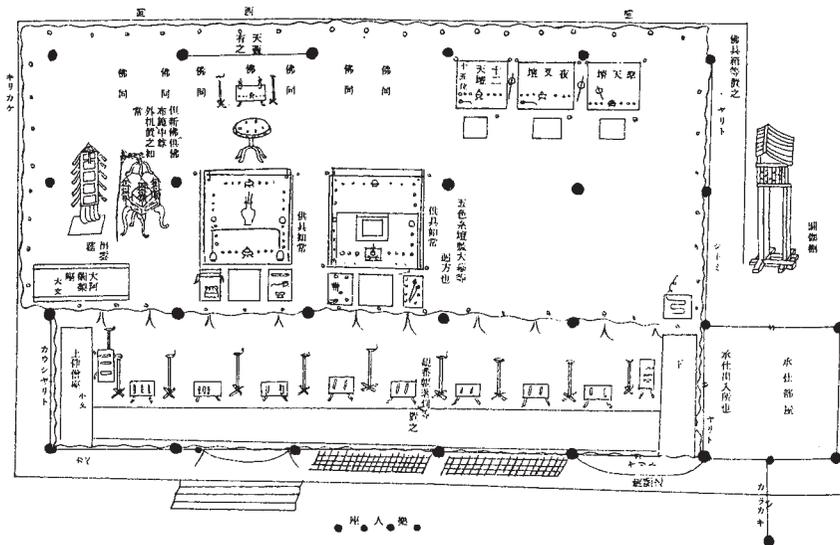


図7 文永4年(1267、表2の32番)の指図(『門葉記』より)

模が、小さく扱われていたからであるように思う。雅楽を伴う天台密教のもう一つの修法には安鎮法があり、ここには奏楽（樂器演奏のみ）だけでなく奏舞（舞と樂器演奏）が盛大に取り込まれている。両修法を比較することで互いの特徴が見えてくると思うが、安鎮法の雅楽については機会を改めて詳述したい。

【参考文献】

- 第二十八卷 山槐記一』 京都・臨川書店
- 『七仏薬師法大法差定』 叡山文庫 延暦寺藏書 法修／部数九四
／書冊九四 昭和四年七月十五日寄託
- 『七仏薬師法記』 叡山文庫 多紀藏 部数一四〇／書冊一九一
- 『七仏薬師法代々日記』 東京大学史料編纂所編 『大日本史料』第
四編之五冊 五〇七～五〇八頁
- 『七仏薬師法日記』 東京大学史料編纂所編 『大日本史料』第四編
之十五冊 二八八～二八九頁
- 『七仏薬師御修法記』 東京大学史料編纂所編 『大日本史料』第四
編之十五冊 八三六～八四六頁
- 『毘沙門堂記』 国立公文書館 内閣文庫藏 和一五四二六／九
(二)／一四四四三四
- 『門葉記』 高楠順次郎他編 一九三四 『大正新脩大藏經』 図像部
第十一卷～第十二卷 東京・大正新脩大藏經刊行会
- 叡山文庫編 一九九四 『叡山文庫文書絵図目録』 京都・臨川書
店
- 竹内理三編 一九九二 『平安遺文 古文書編第六卷』（訂正九版）
東京・東京堂出版
- 伊藤瑞穂他 二〇〇五 『門葉記』 所収指図研究―尊円入道自筆本
の調査を通じて― 『住宅総合研究財団研究論文集』 第三十
- 『阿婆嚩抄』 ①高楠順次郎他編 一九三四 『大正新脩大藏經』 図
像部第八卷 東京・大正新脩大藏經刊行会、②高楠順次郎他編
一九三二 『大日本仏教全書』 三十六（阿婆嚩抄第二） 東京・
有精堂出版部。 ※本稿では主に①を用いた。
- 『叡岳要記』 塙保己一編 一九六〇 『群書類従』 第二十四輯 釈
家部（訂正三版） 東京・続群書類従完成会
- 『楽所補任』 塙保己一編 一九六〇 『群書類従』 第四輯 補任
部（訂正三版） 東京・続群書類従完成会
- 『教訓抄』 林屋辰三郎校注 一九七三 『日本思想体系』 二十三 古
代中世芸術論』 東京・岩波書店 十～二〇七頁
- 『行林抄』 高楠順次郎他編 一九九二 『大正新脩大藏經』 第七十
六卷 統諸宗部七（普及版） 東京・大正新脩大藏經刊行会 一
～五〇二頁
- 『山槐記』 増補『史料大成』 刊行会編 一九六〇 『増補史料大成』

一号二〇〇四年版 二〇七―二一六頁

遠藤徹 二〇〇五 『平安朝の雅楽』 東京・東京堂出版

小野功龍 一九七〇 『雅楽と法会』 芸能史研究会編 『日本の

古典芸能二 雅楽』 東京 平凡社

河村孝昭 一九九八 『行林抄』、鎌田茂雄他編 『大藏経全解説

大事典』 東京・雄文閣 七―三頁

近藤静乃 二〇〇八 『中世如法経十種供養における奏楽と伽陀』

『楽劇学』第十五号 一―二十五頁

松本公一 二〇〇八 『阿婆囉抄』を中心に見る中世天台教学（穴

太西山流）の伝播について、吉原浩人・王勇編 『海を渡る天

台文化』 東京・勉誠出版 三八五―四二二頁

密教辞典編纂会 一九八三 『密教大辞典』（縮刷版） 京都・法藏

館

横道萬里雄 二〇〇五 『体現芸術として見た 寺事の構造』 東

京・岩波書店

◎本稿の執筆については松下国際財団の助成を受けた。

注

1 河村（一九九八）によると、『行林抄』は西暦二一五四年の成立。相

実（天台宗法曼流の祖）の弟子静然が、師との面授口決を筆録した。

七仏薬師法における奏楽

内容は諸尊の作法、供養法の解説である、という。

2 松本（二〇〇八）によると、『阿婆囉抄』は尊澄の編纂書を、師の承

澄が書写・増補した。成立年代は仁治三年（一二四二）―弘安四年（一

二八一）と推定される。内容は諸尊法であり、先師の説に基づき諸作

法・口伝などを整理・抄録し、灌頂・加持・諸寺略記・明匠等略伝・

香葉なども含む。個々の書を『阿婆囉抄』という書名でまとめており、

尊澄・承澄以後にも追補されている。写本は天台宗の穴太西山流の僧

侶が作ってきた。今日の流布本である『大正新脩大藏経』図像部八―九

と『大日本仏教全書』三十五―四十一の活字本は、様々な写本の取り

合せ本である、という。

3 『薬師瑠璃光七仏本願功德経念誦儀軌』には七仏薬師の尊形が（一）

善名称吉祥其身黄色無威印、（二）宝月智嚴仏黄色施妙印、（三）金色

宝光仏黄色説法印、（四）無憂最勝仏紅色三昧印、（五）法海雷音仏白

色説法印、（六）法海勝慧仏青色説法印、（七）薬師瑠璃光王仏其身青

色施妙印、であり、前六体は（七）薬師如来の分身である。これらを

合わせて七仏薬師と言う（『密教大辞典』の項目「七仏薬師」（九七六

頁）。七仏それぞれの前に小机を立て、その上に七仏供（闍伽一前、

仏供二杯、燈台二本）を立てる（『阿婆囉抄』七仏薬師本（①一〇七

四頁）。

4 『門葉記』勤行法二（図像部十二、四二三―四二五頁）によると、大

法と准大法は比叡山（天台宗・慈覚大師）、三井寺（天台宗・智證大

師）、東寺（真言宗・弘法大師）にある。比叡山の大法は熾盛光法・

（一五）

七仏薬師法・普賢延命法・安鎮法であり、准大法は法華法・六字河臨法・如法北斗法・如法仏眼法である。これらとは別の大法・准大法が三井寺および東寺で修される。また、大法と准大法、小法の違いは、壇と助修（伴僧）の構成の違いであり、大法は大壇・護摩壇・小壇と助修約20人、准大法は大壇・護摩壇・小壇と助修8〜12人、小法は護摩壇と助修4〜8人から構成される。七仏薬師法では、小壇は十二天壇、葉叉壇（夜叉壇）、聖天壇の三つになる。なお、比叡山の法のうち、七仏薬師法と安鎮法では雅楽曲の奏舞奏楽があり、六字河臨法では太鼓・鉦鼓と仏具（錫杖・金剛鈴・宝螺）による「乱声」がなされる。

また、七仏薬師法を修する場合の人員（楽人を除く）は、例えば次のようになる。

建保六年十月十一日。於一條殿為中宮御産御祈被始修七仏薬師法

奉行人木工頭成長或記云、中宮權大進次経云々

大阿闍梨権僧正良一

伴僧二十人

良雲法印護摩壇／快雅僧都／成間法眼／成源律師奉行／寛基々々／能々々々／乗覚阿闍梨十二天壇／恵円々々々夜叉壇／慈胤々々々聖天壇／聖乗々々々／光円／宗宴神供／俊雲 審聴西／康実 睿円無／性円西
無勸寺 教違唱礼／宗円東 円遍西

行事僧法橋泰宗 （『門葉記』七仏薬師法五（図像部十一、五

四五頁）

このように助修（伴僧）は、護摩壇・小壇の阿闍梨の他に、別の役を担当する者で構成された。さらに、助修の他にも奉行と行事僧の者もいたことがわかり、別の事例では承仕、中堂衆などもいた。

5 表2の33番では、全日程のうち計三日に奏楽された。

6 主上御瘡瘡御祈のため、内裏西大盤所にて、建久四年（一一九三）正月八日からの修法で、開白日に「但依諒闇、無音楽。」（『門葉記』七仏薬師法二（図像部十一、五三二頁））と書かれる。

7 太平楽破については、「此破、謂いはゆる太平楽。楽者平調曲也。」（『教訓抄』卷第三（五十五頁））と書かれ、楽理構造の分析では平調の傾向を示す（遠藤 二〇〇五・一八一〜一八二頁）。

8 久安五年（一一四九）三月の日付を持つ「東大寺花厳会楽人禄物注文」（『平安遺文』二六六三号（竹内 一九九二（二三三九〜二四〇頁）））には、「左舞」「右舞」「楽人」と注記される者がいる。それに対して、その注記がない者は銅拍子・大拍子・措鼓・太鼓・鉦鼓、および太鼓持・鉦鼓持を担当した。その者たちは禄物が低いことにより、身分が低かったと考えられる。

Gagaku in the *Shichibutsu-Yakushihō* Practice of Esoteric Buddhism

TORIYABE Teruhiko

This paper illuminates how gagaku was created in the religious service *Shichibutsu-Yakushihō*, one of many practices of esoteric Buddhism at Hieizan.

Historical scholarship on Japanese music positions Hieizan as a center of *shōmyō* for the Sammon school in the Tendai sect, and does not mention gagaku performances. However, gagaku has been played at Hieizan from ancient times to the present. The opening ceremony of *Kompom-chūdō* in 794 included gagaku, and in fact, is the second oldest Buddhist rite with gagaku in history. Gagaku is performed currently at Hieizan in *Osembō-kō*. This paper is mainly based on records and illustrations of the *Mon'yōki*, which was completed in the fifteenth century, and has many documents on the Tendai sect's *Shōren'in* shrine from the twelfth century to the fifteenth century.

In the first chapter, I briefly explain *Shichibutsu-Yakushihō*. This act was a particularly special and sacred act of esoteric Buddhism at Hieizan, and rarely held by other schools within the Tendai sect or by other sects. The Buddhist scripture “*Shichibutsu-Yakushi-kyō*” instructs that musicians perform as part of the ritual.

In the second chapter, I provide a chronology of the records of the ritual lead by Hieizan monks in Hieizan and Kyoto, and then detail the relationship between the religious service and gagaku. Through the entire program of this service, gagaku was played in the opening, middle, and ending sections of both the first day and the last day.

In the third chapter, I analyze gagaku. The musical instruments that were usually played in a gagaku ensemble were the wind instruments *shō*, *hichiriki*, and *ryūteki*, as well as the percussion instruments *taiko*, *kakko*, and *shōko*. In *gyōdō* performances, percussion instruments *ikko* and *keirōko* were added. According to the records, the players were well organized and a small number of experts were assigned to the *Ōuchi-gakusho* of the court. There is a good possibility that some persons of low status also joined, however, their names were not recorded. All of the musicians played several instrumental pieces and performed the dance *Ikkyoku*. According to the records and illustrations, they played in a hallway outside of the act room, or a garden nearby.

Historical study of Japanese music from ancient times to the present has dealt with the relationship between gagaku and Buddhist rites which are mainly based on *Kengyō* style.

This paper demonstrates that this relationship appears not only at *Kengyō* rites but also in the services of esoteric Buddhism.